産地。今ではヨーロッパにも定着し、「夏の花」として愛好されている。

女子柔道リスペクト無きと告発し我は告げ得ぬパワハラ抱ふ　間宮清夫

近年少なくなってしまった社会詠だ。組織の中の人間関係がことさらむつかしくなった昨今。そのむつかしいところをあえて作品化しようとする積極的取材に注目した。だれかと話をしている場面だろう。会話の中でわれは「リスペクト無きと告発し」、そこでは筋道を通しながら、じつは同種の問題をかかえているというのだ。

月光に馬体浄めて草食みもせず腹の仔の動き聴く母　鷺沼あかね

今月号の宇都宮とよ選で「特選」になり、「選者コーナー」で懇切な鑑賞があるので参照されたい。サラブレッドの出産をうたった一連中の作で、ここは出産直前の場面。シンボリックかつ美的な表現でその点はいいのだが、リアリティに欠ける感じもする。

名にし負ふ「世界遺産」の網のがれ大き息はく由比の浜風　大北敏子

こぞって世界遺産になりたがる世に、世界遺産にならなくてよかったと見る、野党精神、批評的視点が出色。商売の人が喜ぶのはわかる。が、自然は喜んでいるはずもなく、商売人以外は本心では嬉しくないのではないか。私たちはメディアに流されて本心が見えなくなっているらしい。なお、「由比の浜」と表記すれば蒲原町の地名になり、鎌倉の「由比ヶ浜」とはちがう。「由比の浜」とするならば、一連中の鎌倉の歌は捨てた方がいい。

水上の『飢餓海峡』の犬飼は人を殺しし放火犯とぞ　犬飼亮介

自分と同姓の人物が小説に出てくると、やはり気にかかるものだが、ここはそれだけで一首にして独特。突き放した表現がいい。印象的な余韻をのこす。

着水音背後に響く雲場池あとに続くもよき音のして　越智敦子

軽井沢の雲場池である。背後の音をうたって、ふり返って見ようとしないのは、何が着水したのか、作者には分かっているからである。小さな謎を仕掛けて成功。

ひたりひたりひと夜たよらに寄る波の港区台場一丁目　夏　松本ちゑこ

谷岡亜紀が「選者コーナー」でこの歌の「たよらに」に触れている。「筑波嶺の岩もとどろに落つる水世にもたゆらにわが思はなくに」「足柄の土肥の河内に出づる湯の世にもたよらに子ろがいはなくに」。出典はともに東歌。八世紀の東国方言と思われる。こういう遊び心を支持したいと思う。

献体を終えたる父を連れ帰る父が来たことないアパートに　藤島秀憲

新刊歌集『すずめ』に長く父を介護する作があった。その父が帰ってきた場面である。「連れ帰る」に思いがこもるところを読みとりたい。